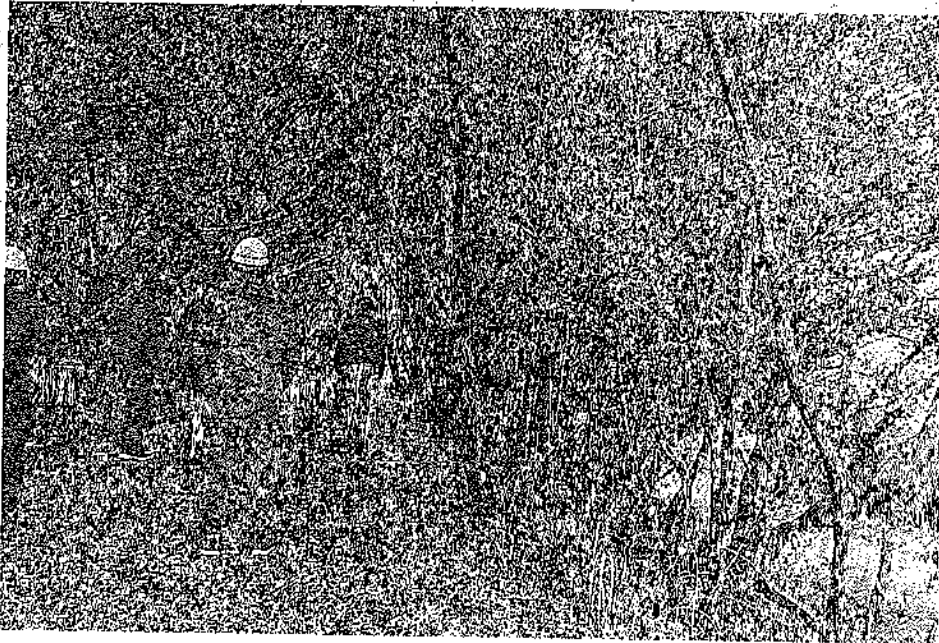


# 神戸産の備長炭 可能性模索

神戸市が里山や園地で持て余す木々の有効活用に動き出した。群生するカシの木から備長炭を製造し、クラウドファンディング（CF）で「神戸産材の紀州備長炭」を返礼品に掲げる。伐採木に付加価値をつけて収益化の可能性をさらに探り、環境保全につながる資源循環の実現を目指す。

（金 豊華）

## 里山や園地の木々 市が有効活用へ



横尾山のふもとに広がるウバメガシの純林。遊歩道沿いの木々は製炭向けで伐採された。2024年1月、須磨区横尾4（市提供）

## 収益化探り資源循環目指す

CFは都心部で木々を増やす「こころ木陰プロジェクト」の支援名目で6月下旬まで実施している。3万円の寄付に対し、備長炭3kgを返礼。高級品として重宝される備長炭は料亭などをはじめ、海外でも需要が旺盛。今回原料で使われたウバメガシは、須磨区の市営地下鉄妙法寺駅南にある横尾山のふもとで伐採した。

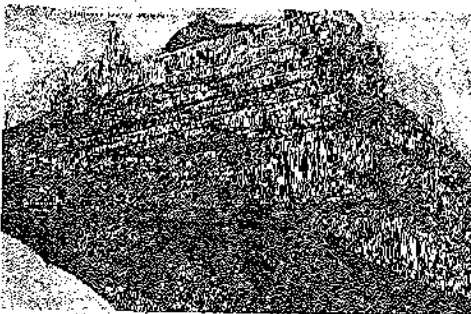
群生する範囲は約4・5畝。「ウバメガシの純林は全国的にも少なく珍しいよるだ」（市公園部）。従来は間伐もされずほとんど手つかずだったが、昨年度から市内部で活用策を議論し、今年1～3月に製炭業者に依頼して22・5kg分を伐採した。

市によると、事業者の説明では、紀州備長炭の産地である和歌山県のウバメガシと品質で遜色はないという。担当者は「安定的に伐採を続けられ、収益が見込めれば維持管理の民間委託を検討したい」と話す。

市内には街区公園が1652カ所。剪定などの維持管理コストは外部委託で年間10億円を超える。ウバメガシに限らず伐採木を活用した事業展開の仕組みを見いだせれば民間投資を促し、行政負担の軽減を図る。そんな青写真を描く。

三宮の繁華街で60年以上営業する「やき鳥 のんちやん」の辻野美千代社長は、CFで備長炭を購入。SDGs（持続可能な開発目標）に関心があり、神戸の木材で製造された炭に引かれた。店で扱う炭は山口県から取り寄せているという。「神戸産の炭を地元でまわせば一番良い。採算が取れば使いたいという思いはある」と期待を寄せる。

神戸大名堂教授で森林病理学が専門の黒田慶子副市長は「木材でお金を稼げる仕組みが確立できれば、山林の所有者が手入れに動くモチベーションにつながる」とみる。環境に優しい地産地消の仕組みづくりを念頭に、市内での炭窯の整備も検討している。「緑豊かな山に映っても手を入れなければ病気になるったり、貧相な木しか生えなかったりする。里山を次世代に渡すためにも、取り組みが関心を広げる一助になれば」



神戸に群生するウバメガシで製造した備長炭。手始めにクラウドファンディングの返礼品に活用している